
書 評・紹 介

河野稠果著

『人口学への招待』

中央公論新社, 2007年 8月, 282pp. (中公新書1910)

評者は、人口学の入門書として人口学そのものを扱った新書として、1978年に白水社からクセジュ文庫の一冊として刊行されたアルフレッド・ソービィ著（岡崎陽一訳）『人口』以外に知らない。歴史人口学や寿命、高齢化、少子化といったテーマでは相当数の新書が世に出ているが、おそらく日本人研究者の手になる人口学をテーマとした新書は、本書が初めてであろう。

超少子高齢化・人口減少社会という言葉は近年の日本社会の特徴をあらわすキーワードであるが、こうした言葉で表現される現象を解き明かす科学が、本書の著者が専門としてきた人口学である。

本書の特徴を理解するには、著者の歩んできた人口専門家としての略歴を知っておくと理解しやすい。著者は戦後のフルブライト留学生として米国ブラウン大学において人口学と社会学を学ばれた。その後一貫して国連人口部や国際人口学会を中心として長年にわたって国際的な舞台で活躍された経験がある。本書の特徴となっている人口にまつわるそれぞれの興味深いエピソードは、国連を舞台に展開された世界人口会議や国際学会の活動を通じて得られた裏舞台の生情報と著名な国際人口学者との交流に裏打ちされた体験に基づいているからであろう。このことを念頭において本書を一読するとより一層、人口学が興味深い。

本書の特徴は、なんとといっても人口学のなかでも中心的な位置を占める形式人口学（Formal Demography）を真正面において章の構成がされていることである。序章に示されているように、人口学は学際的な学問であり、生物人口学、経済人口学、社会人口学、歴史人口学といった関連領域と接合した幅広い学問領域を構成するが、その中でも出生・死亡・移動等の人口動態要因と人口構造の関係を研究する分野を形式人口学という。1980年代頃まで、日本ではDemographyの訳語として人口統計学というのが一般的であった。本書のタイトルにも用いられている人口学という言葉が新聞にも登場し市民権を得たのはつい最近のことである。

さて本書は、序章において「人口急増から激減へ」と題して人口変動の特徴が概観され、人口学という学問が紹介され、それに続いて、第1章から第3章では、人口学の最も基本的な概念と現代的課題である少子化にかかわる人口学上の見方や考え方が平易に解説されている。専門家には常識的な概念であっても、なかなか一般の読者に分かり易く説明することは難しいが、本書では実に分かり易い。第4章では、多産多死から少産少死への人口動態の歴史的变化、すなわち「人口転換論」が解説されている。著者が国連時代に体験された大論争はまさにこの「人口転換論」が議論された時代であり、著者の幅広い知見が余すところ無く簡潔に語られている。第5章は生物人口学の観点から、第6章では、少子化の最大要因である「結婚（非婚・晩婚）」について、第7章では出生率低下を説明する代表的な五つの社会経済理論・仮説が解説されている。そして、第8章と第9章では将来の人口推計に關した出生率推定と人口推計そのものについて、実際の推計を行った立場から経験に基づいて推計の可能性と限界、そして有用性について述べられている。そして最後の終章では、「人口減少社会は喜ばしいか」と題して、現代の日本社会が抱える「人口減少社会」に対する著者の人口学者としての見解が明らかにされている。

わたしたちは、目の前の人口研究に没頭して人口の細部の研究に日々追われると、人口学全体を俯瞰してみることをつい忘れがちになる。本書は人口研究の専門家を読者として想定して編纂されたものではないが、時として人口研究を俯瞰してみるためにも多くの人口専門家にも是非読んで頂きたい一冊である。

(高橋重郷)